

Finger-painting (5)

—特殊児に施行せる結果—

大阪市立大学

小西勝一郎

並河信子

山田聖子

指絵による人格診断上の基本的資料を得ようとして、施設児、精薄児、虚弱児、精神病児などの特殊児の指絵と普通児の指絵とを、年齢・性・人数を同じにして比較した。なお Doiken が H. Lehman の方法によって客観的な評価尺度を定めているのでその妥当性を吟味しようとした。

次のような有意な差が認められた。

(1)施設児と普通児の比較(施設児四三名)

普通児に比べ施設児には、画面全体を混色する。人差指だけでかく、画面全体を用いない、すぐ描き始めない、という者が多い。

(2)精薄児と普通児の比較(精薄児四名)

普通児に比較して精薄児では、最初の選色は緑が少なく、三種以上の運動をしない、画面全体を混色する、人差指だけでかく、表現内容が第三者にわかりにくい、表現した物の数が少ない、描画時間が

短い、描画中に水や手拭を用いない、などであるものが多い。

(3)虚弱児と普通児との比較(虚弱児二十六名)普通児に比べて虚弱児には、青・茶・黒・紫の使用するものが少なく、色彩の使用数も少ない。画面の一部の混色も少ない。描画時間も短く、家に自分のかいた絵を持って帰りたいというものが多い。

(4)精神病児(十二名)

精神病児の最初の選色は赤や橙が多い。人差指だけでかく。描画面積も少なく、描画内容は支離滅裂であるなどの者が多い。

Doiken が使用した評価尺度による結果は、普通児に比べ施設児では clarity が低く、精薄児は clarity と Contact of reality が低く、虚弱児は Affective range が低く、精神病児では Energy out put, Contact of reality, clarity, Affective range が低く、この評価尺度については検討の余地があるように思われる。

上述の結果は必ずしも期待されるような傾向を示したとも云えないが、更に検討していきたい。

自画像の発達の研究

お茶の水女子大学

松村康平

田川朝子

〈研究目標〉

幼児の絵を単に知的要素のみでなく、性格・環境をあらわすという立場から、自画像のもつ意味を重視して、幼児の自己のとらえかた、外界への適応過程を発達的にとらえようと思った。

〈研究対象〉

東京渋谷のさくら幼稚園児のもの三千五百枚を対象とした。

〈研究方法〉

分析基準をマッコーバー・レヴィーの研究、大伴・扇田氏の研究のものを参考にして一四三項目のものを作成し使用した。整理の仕方としては、個人を単位として、二年保育児一人約百枚、一年保育児一人約五十枚をまとめて、それぞれ年令別、月別、男女別に集計した。統計的処理としてはノンパラメトリック法のランの傾向分析、ムワ・ワリスの検定、Tテストを用いた。

〈結果のまとめ〉

分析基準の検討については、比較的問題のあるものを項目に選んだが、すべて一杯でなく、四つの型があり、男女によっても異っていた。しかし、項目の数だけで比較すると、一四三項目中一〇七項目が、全体の子どもの二十％以下しか描かなかったというから、分析基準の予測性が比較的高かったように思われた。

次に、年令的発達過程、幼稚園生活への適応過程、保育のもつ意味、色彩についてまとめたのべると、二年保育に関しては、二年間の幼稚園生活が、男子では良い面の積極的増進を、女子では男子と同じような型のもと、女性らしさを増進させるものというように、保育の効果が異っているように思われた。色彩に関しても、男子は五才末まで、女子は四才で発達はとまり、女子に色の数は多く

みられた。一年保育児に関しては、男女共に均斉化には著しい進歩がみられ、二年保育との差は色彩においてもみられなかったが、共同生活でもたらされる人間関係への積極的関心などが、一年保育児では劣っているのがみられた。

幼児の観察教育について

(第一報)

幼児と保育者の描いた

汽車の絵の比較研究

広島女子短期大学

山 中 和 子

山 内 美 子

〈研究目的〉

科学教育の重要性が叫ばれている今日、幼児が興味を持っている乗物を取り上げて、幼児と保育者に汽車の絵を描かせ、いかにすれば幼児の観察教育を合理的におこなうことが出来るかを考究しようとした。

〈研究方法〉

保育所、幼稚園の幼児二〇八名と保育者二九三名に汽車の絵を描かせ、これを集計するに当り次の如き枠を設けた。蒸気機関車が客車または貨車を連結しているものでしかりこれを機械的に描いてあ